

要旨

「戦地再訪」作品に見る「傷」—戦地空間と身体への異変

名古屋大学大学院 人文学研究科

博士後期課程 2 年 小島秋良

1964 年の海外渡航自由化以降、アジア・太平洋戦争で戦地となった地域を多くの戦友や遺族が訪れるようになる。遺骨収集や慰靈を目的とする訪問体験は、手記や報告文などに書き残されていった。このような「戦地再訪」作品には、訪問日程や場所などの報告のみならず、かつての戦地という空間に立つことで、訪問者の身体に生じた異変についても描かれる。特に亡き戦友の「靈」としての存在を身近に感じるエピソードは、訪問地域や年代を超えて複数の再訪作品に登場する。このような異変は、戦争の非経験者には信じがたいものも含まれるが、再訪者にとっては敗戦から数十年後も抱え続ける自身の「傷」と向き合い、癒しとなっていく過程と言えるのではないだろうか。本発表では、戦地という空間が再訪者に与える影響を再訪作品に描かれた身体、特に視覚や聴覚など感覚への異変に着目して考察する。また訪問者が再訪で得た不思議な体験を文章化し、作品として書き残したことの意味付けを試みる。